

1-3 ウエペケレ「ユク シキ セイレカ」解説

解説：萱野茂

萱野：私は、Iskar putu... Iskar emko kor nispa というのは、石狩川の流れの下流の方で住んでおった、一人の男でありました。

なに不自由なく暮らしておったのですけれども、それだけ不自由なことは子供がなくて困った。近所の人のお勧めもあり、私自身のその、本妻のお勧めもありましたので、近所にいる一人の娘を、妾として迎えて、何か月か暮らしておるうちに、まあ、身ごもったと、そして男の子が一人生まれた。それを、妾である後から来た人、女の人の手にも触らないほどに、私の本妻は、それを大切に育てておってくれた。どうやら、欲しかった子供も生まれたので、私は、ある時に熊狩りに山へ行った。

そして、kucacise という山での狩小屋の所へ行っている準備して、その日のうちに仕掛矢をしたら、その日の夕方には、すでに熊の一頭も捕れるというふうになり、その熊のそばに行く……、まあ熊が捕れた、そのそばに行くと、何かしら家の事が、急に急に心配になったので、その熊のそばへ、kamuy nisuk [神に頼む] と言って、アイヌの風習はそういうあれがあるんですが、熊を捕ってもその日のうちに皮を剥ぐことできないときには、神様を作ってその熊のそばに置く風習があるんですが、そのように、その捕れた熊のそばへ神様を一つ作っておいて、何か家の事が心配ですので、家へ行ってきました。どうぞ、神様どうし newsar [話] という、まあ話し合いしながらこう、ゆっくり過ごしてください。と、言いながら、我が家をさして、一散に駆け出した。

家へ帰ってみると、家の方は、いわゆる本家の方では、あかあかと灯がともって、大勢の人が出たり入ったりなんか騒がしい。けれどもその家を通り越して、いわゆる妾の家の方に入っていくと、私の妾は、何かしら鍋に入れて、一生懸命煎っておる。こう返したりしながら、こうしゃもじで煎るようにしている。それは、脂を弾くような音をも交えながら、煎っておった。「どうしているんだ？ お前は何をやっているんだ？」という、それと同じ相前後して、その煎っておったものが、ものすごい大きな音で弾けた音がした。「どうしたんだ、どうしたんだ。」と言っておるところへ、隣の本家の方から走ってきて、男の人が走ってきていうのには、「どうしたんだ？ 帰ってきておったんだったら、どうして本家に寄らずに直ぐ来た？ あんたの奥さんはもう亡くなりましたよ。」と、

こういうふうに言われたと。

驚いて行って見ると、まあ急病か何かのように、もうすっかりこと切れておった。村の人たちが皆で集まって、いろいろ手当をしても、どうすることもできずに、そのまま死んだ。私も、その原因もさっぱりわからなくておった。

何日かして、私の本妻、亡くなった本妻が夢枕に立って言う事には、あんたの連れてきた妾というのは、見かけは非常にいい人であったのに、非常に精神の悪い人だったので、私を呪う意味で、鹿の目玉を二つ抜いて、それを鍋に煎る。そしてその鍋に煎っておる鹿の目玉が、はじけると同時に私が死んだんであった。と、こうして死んでみて、初めてそれは分かったけれども、今ではどうすることもできない。

と、しかし、あんたの所へは、いい女の人に来て、後添えとして住み込み、そして、男の子と女の子が生まれますが、その女の子の方は、アイヌ語で言う **tusu** [神おろし] と言いましょうか、その **ueinkar** ということですね。**ueinkar** というのは、こう呪術と言いましょうか、そんなことで、すべてのことを見通して言い、子供二人生まれるから、といい、夢枕に立ったのを見た。それで私も、私の家内の死んだ原因が分かりましたが、非常に悲しんでおる。

まあその、私の本妻を、呪い殺した妾の方も、その兄弟たちによって、まあ、いじめて、いじめ殺されるようにしてしまつて、まあ、何年かするうちに、本当に私の本妻の言ったように、女の人が荷物を背負つてやってくる、私と一緒に、そして、夢にあったと同じように、男の子が生まれ、女の子が生まれ、そして、その女の子は、非常にすべてのことを、病気の原因とかそうしたことを、当てるといふか、それでなに不自由なく、私たちは暮らしておりました。と、石狩のアイヌが語つた。という物語でした。